

「北海道度の情報誌 THE JR Hokkaido 10月号」
 (株)北海道ジェイ・アール・エージェンシー発行

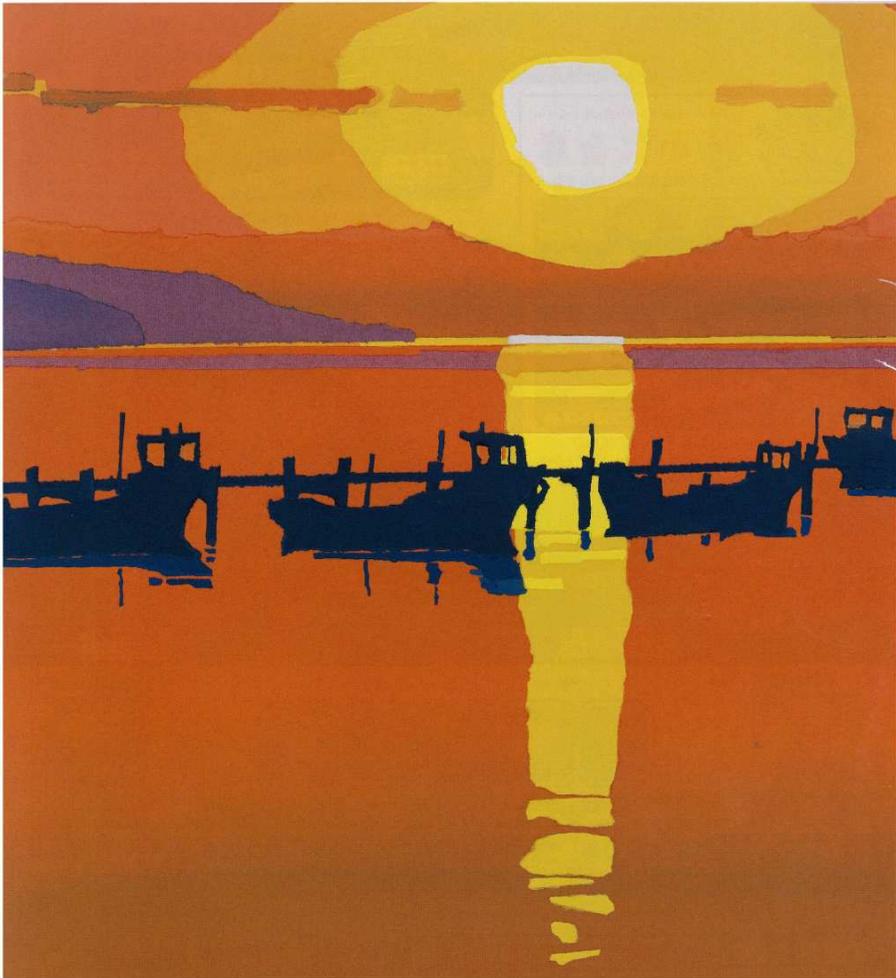
2008年10月1日発行(毎月1回1日発行)10月号通巻248号 1990年4月16日第3種郵便物認可

THE JR Hokkaido 10 OCTOBER No.248

北海道旅の情報誌

特集 英国発フットパスを歩こう

黒松内・田園と北限のブナ林と



英国発
 フットパスを
 歩こう

黒松内・田園と北限のブナ林と

フットパスとは、十九世紀の英国で生まれた歩く人のための道。
 田園を闊歩し、バブに立ち寄っては、ビールとその地の産物に舌鼓を打つ。
 地域の自然や文化にゆっくり触れながら、歩く喜び……。
 そんなフットパスの思想が、北海道に根付き始めている。
 十月に黄葉を迎える北限のブナ林の町、黒松内のフットパスを訪ねた。

文：北室かず子 写真：田淵立幸



デュークシャイコースを歩く「フットパス国際フォーラムin黒松内」の参加者たち
 2008年8月23・24日取材



ピーター・ラビットが出てきそうな英国のフットパス。どこかで見えがするのは、北海道に似ているから？
写真提供=エコ・ネットワーク



1930年代、田舎を歩く市民たち。写真提供=英国・ランブラーズ協会

国道からちょっと離れただけで車の音は消え、秋の虫の音に入れ替わった。各コースには、フットパスの「道標」が分岐点などのポイントごとに設置されているので、それを参考に歩いて歩くことができる(チョコシナイコース)。



英国に似、北海道でもストックを開発。ネマガリダケのしなやかな弾力が足の負担を軽減してくれる。札幌の職人の手によるもの。問い合わせ先/エコ・ネットワーク ☎011-737-7841

こんなフットパスを北海道でも広めようという取り組みが、エコ・ネットワークを主宰する小川巖さんを中心として七年前から始まった。本場のノウハウを吸収する英国への視察は既に七回。小川さんはその土地ならではのフットパスを住民や自治体と共に整備している。「よそから来た人が町を感じてくれることでコミュニケーションが生まれます。それはわが町への誇りにつながる。健康ウォーキングとフットパスの違いは、前者が自分の健康のためだとすれば、後者は自分と社会の健康のためといえるのではないだろうか。歩くことは無限の広がりを持っているのです」。



黒松内はほぼ全道のフットパスは掛ける小川巖さん「北海道が全国に誇る財産は自然フットパスは産業振興になる」が持論。



1 道の駅「くろまつない」に掲示されているマップ。個人で



歩く場合は2万5,000分の1地形図など詳細な地図との照会をお勧めする。2 足の向きで進行方向を示す道標。町内ボランティアの発案だ。3 熱那川の流れとともに歩け、歩け。

チョコシナイコースは、川あり、山あり

始まりは産業革命

「くまのプーさん」や「ピーター・ラビット」の挿絵に登場する牧草地や畑に作られた素朴な木戸や、石垣を越えるための踏み段を一覧になったことがあるだろうか。これがフットパスの出入り口だ。フットパスは、世界史の教科書に必ず出てくる産業革命と切っても切れない関係にある。十八世紀後半、英国では産業革命による工業の発展に伴い、農村から都市へ労働力として多くの人口が流入し、都市は過密状態になった。一方、農村では、大農主が農地を集約して規模拡大を図るとともに、私有地を囲って自由に入入りできないようにした。こうした状況に対して、自然の中を自由に歩きたいと願った市民が、粘り強い闘争の末、十九世紀になって勝ち取ったのが「歩く権利」だ。今や人々は公道のみならず個人の牧場や緑地を歩く、権利として勝ち取ったものだから、楽しむのも自己責任。手取り足取りの案内はなくても、自らの意思で行動するのがフットパスである。



ブナは温帯を代表する落葉広葉樹。日本では南限が鹿児島県大隅(おおすみ)半島、北限が「黒松内低地帯」(寿都〜長万部間の低地帯)。歌オブナ林は国の天然記念物。10月下旬撮影。写真提供一斎藤均



●黒松内町特産物手づくり加工センター「トワ・ヴェール」
黒松内町字目名152-4 ☎0136-72-4416。
10:00〜18:00(11月1日〜3月31日は17:00まで)、月曜定休(祝日の場合、開館。火曜休館)。左は西沢コースを歩き切った後のイベント用昼食バイキング。トワ・ヴェールの美味づくだった。満足!



学芸員の斎藤均さんは森林生態学が専門。鹿児島・南限のブナ林の研究歴もある。

ブナ林は黄金色に輝いて
さて、黒松内といえば北限のブナ林で知られるが、歌オブナ林には往復四〇の、添別ブナ林には一周二〇の散策路がある。「ブナセンター」学芸員の斎藤均さんいわく、「北上してきたブナが黒松内に到達したのが約千年前。歌オブナ林にはほとんど人の手が入っていないので、樹齢約三百年、高さ三十メートルの巨木もあります。一方、添別ブナ林は約八十年前に伐採されて再生した二次林なので樹齢が若く樹間が狭いため、ぐっと取り囲まれる迫力を感じます。起伏があるので沢の下から生えている木の葉を目線と同じ高さで見られるのも添別の特徴です。黄葉は例年十月下旬が見頃ですが、逆光で見ると藤城清治さんの影絵のよう



1 霧雨の中、牛が草を食む。2 雨だてに楽しい。進め、進め。3 ブナ林が貯めた清らかな水が豊かで、機本もの川が流れる。

西沢コースは、酪農地帯を突っ切って



花を見つけては撮影に余念がない。2員がはさまった地層を発見するやおじさんたちは化石掘り少年に変貌。太古の昔、ここは海だったのだ。3 途中、ポランティアが席バブを開いてくれた。「おお、これぞ大人のフットバス!」

黒松内、農村景観を歩く

小川さんの話を聞くときと歩きたくてうずうずしてきた。折も折、八月下旬に「フットバス国際フォーラム in 黒松内」が行われるという。英国で一九三五年に発足した伝統あるランブローズ協会のフットバス監督官、マイク・ミルズさんも来日するとか。これは逃すわけにはいかない。

フォーラムでは黒松内町の三本のバスすべてを歩いた。JR函館本線熱帯駅から徒歩五分の道の駅「くろまつない」から始まるチョコシナイコース(全長十キロ)、寺の沢川コース(二キロ)、と西沢コース(十キロ)だ。チョコシナイコースは、地元住民と札幌からのポランティアが、深い笹やぶに埋もれていた廃道の草を刈り、地図や標識を整備する五年もの作業で蘇らせたものだ。左に熱帯川、右に畑や牧草地を眺めながら、他愛ないおしゃべりに興じたり、花にカメラを向けたりしながら歩く。一行約百人は「自分のペースで楽しもう」を実践しているから、列は



ランブローズ協会のマイク・ミルズさん。同協会は1935年発足。会員数14万人を誇る歴史とパワーのある団体だ。



フットバスのコースでは、ヤマブドウのようなふだん気づかない小さな実りにも目が奪われる。

フットパスの大地、北海道

現在、北海道内では約30もの地域がフットパスを整備中だ。自然ばかりではなく歴史のフットパスもある。南幌町のパスは、旧・幌向村駅通跡を起点にしてあぜ道を歩き、英国のナローボートよろしく旧運河をゴムボートで下る。えりも町には、幕末の探検家・松浦武四郎が歩いた猿留(さるま)山道を蘇らせた山道コースがあり、日高山脈唯一の湖、ハート型の豊似湖が一望できる。様似町の様似山道パスも、歴史に埋もれた道を復元したものだ。一方、道東は、雄大な牧場景観が持ち味。根室フットパスは、5人の酪農家集団「AB・MOBIT」が自分の牧場に開いたパスで総面積520ha! 北根室ランチウェイはJR網本線美留和駅(弟子屈町)と中標津町交通センターを結ぶ約71.4kmもの道だ。道東のエアーズロック、モアン山も待ち構えている。

英国風ナローボートの運河下り(南幌町)



様似山道パス(様似町)



写真提供=エコネットワーク

い、長年、家族のために作ってきた体にやさしい食べ物だ。「一番のこだわりは、生産者の顔が見える食材を選ぶことです」と丸口さん。秋は黒松内産かぼちゃのタルトや、余市産りんごのドイッ風アップルパイがお目見えする。

「とうふ処 みうら」の三浦義也さん・陽子さん夫妻は、大豆を微粉末にして丸ごと使い、おからを出さない豆腐を作っている。自家栽培した大豆の甘みと香りが凝縮した、濃厚なおいしさだ。「その日の気持ちに味を出してみました。だから穏やかな気持ちで作らなくちゃ」と陽子さんは微笑む。

気持ちを大切にしているのは、和生菓子「すずや」の宮内幸基さんと同じだ。「心で作ろう。おおいしくなあれ、やさしい心で」と書いた紙を厨房に張り、毎日、小豆を煮て餡を作る。宮内さんは鎌倉の名店「美鈴」で十四年も働いてきた筋金入りの菓子職人。「小豆も餅米も蕎麦も黒松内産。地元で食材が揃っているのが何よりの魅力です」と言う。

環境雑貨屋「リトルトリ」を営む宮川哲治さんは、フットパスのボランティアでもある。土地に根を張りたいと本州から黒松内に移住した。エコロジーとフェアート

レードをテーマにした雑貨を扱うフェアトレードとは、途上国の生産者を支援し、現地の技術を生かした製品を公正な価格で輸入する取引のこと。自然関係の図鑑や雑誌も充実している。新たに設定、整備していく予定の添別ブナ林と市街地を結ぶフットパスのコース沿いに位置することにもなるので、ぜひ、立ち寄りた。

フットパスは、自然と暮らしをつないで延びている。歩けば違う景色が見えてくる。会話を交わせば必ず発見がある。それはかけがえのないものを体と心に刻む旅になるはずだ。



今年の北海道洞爺湖サミット参加8カ国にもすべてブナ林があるが、森林伐採によって北限のラインを迫れるのは日本のみ。そういう意味でも黒松内は稀有(けう)な場所だ。ブナ林を歩くにはブナセンターなどで販売している「北限のブナ林ガイドマップ」100円がたいへん便利。観察ポイントがイラスト化され、所要時間、距離もわかりやすい。10月下旬撮影。写真提供=斎藤均



●ブナセンター
黒松内町宇黒松内512-1 ☎0136-72-4411、9:30~17:00、月・火曜休館(祝日の場合、閉館)。夏休み期間は無休。ブナセンターでは専任ガイドがブナ林をガイドし、旬の味覚も楽しめる「養葉のブナ林・宮泊バグ」を企画している。10月22~30日の間(土曜日を除く)の泊3食温泉つき(大人8,800円、小学生5,000円)で秋のブナ林を満喫できる。



(上)冬眠に備えるシマリス。(下)今秋は歌才ブナ林の通称「ギンリョウウの坂」でブナの実が身近に見られそうとの情報あり。

す。ぜひ、さまざまな角度から眺めてみてください」。ブナは「緑のダム」と呼ばれる。大量のブナの落ち葉は分解されにくいいため、ゆっくりと腐葉土の層が形成され、それが雨を貯え、清らかな水を生み出す。ブナ林はおいしい水、豊かな地の恵みの源でもある。

さて、ギネスで喉を潤し、フィッシュ&チップスで腹ごしらえ。時おりワーズワースの詩を口ずさみ、空を見上げる。のが英国流フットパスの悦楽だとすれば、黒松内流フットパスにもこんな素敵なスポットがある。

「マザーネイチャー」のパンとケーキは、店主の丸口ゆみ子さんが、道産小麦粉と地元の材料を使



1 マザーネイチャー/黒松内町宇黒松内564 ☎0136-72-3728、11:30~19:00、土・日・月・祝日、黒松内小休、1月は全休。3 すずや/黒松内町宇黒松内62-4 ☎0136-72-3581、9:00~18:00、水曜定休、年末年始休

学校の夏休みと冬休み定休。2 環境雑貨屋リトルトリ/黒松内町宇黒松内512 ☎0136-72-4144、11:00~18:00(11月1日~2末日は17:00まで)、火曜定休、週開休。4 みうら/黒松内町宇赤井115 ☎0136-73-2114、9:00~18:00、無休(年始・週間および11月1日~31日は木曜定休)。

黒松内流フットパス
お立ち寄りスポット